シオン通信

大宮シオン･ルーテル教会 礼拝説教集

2006 年１１月　　第５号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax：048-663-0215

http://www.eotown.com/01church/

パパのような大人になりたい

大宮シオン･ルーテル教会

梁　熙 梅(やん･ひめ)

「ママ、僕はね、パパのような大人になりたいと思ってるのさ」。

これは、小３の息子からある日の夕食の時に出された言葉です。わたしは、正直にはっと言う思いでした。同時に、どのようなところがパパのようになりたいと彼に思わせたのか、すぐ聞きたくなりました。すると彼は、「二つのことなんだ。一つは、僕は、今は、タバコが嫌いだけど、大人になったら吸いたくなるかもしれないでしょう。だから、パパのようにタバコ吸わない大人になりたいのさ。もう一つは、結婚のこと！パパのようにきれいな人と結婚したいからさ」。はっとする思いで息子の話を聞いていたわたしは、ほっとさせられることと同時に涙目になってしまいました。「パパのようになりたい」と言っている言葉の中にはママのこともしっかり認められていたからです。子どもと二人暮らしが始まって７ヶ月が経ちました。二人暮らしは少しさびしいどころもありますけれど、二人の暮らしの中にパパの存在も忘れられていない、離れているけれど一つの家族であるということが子どもの心の中にしっかり位置づけられているのだと、感じたときでした。

わが子だけではなく、ともに育っている世界の子どもたちの心が明るく健康で育てられることを祈っています。特に、今、日本の教育界においては大切なことが問われています。この問い掛けに、政府の教育関係者や学校の現場の教育者たちは逃げることなく真正面から向かい合っていただきたいのです。イエスさまは、子どもたちを迎え入れ、大人たちの間に立たせて祝福してくださいました。子どもたちが大人たちの間で明るく、健康に豊かな者として育てられることを願っておられるのです。子どもたちと関わる私たち大人の眼差しが常に問われていることを生活の場でも気づいていきたいと思います。いのちを失うまで犠牲を強いられていた子供たちとご家族の上に神さまからの慰めがありますように、祈っています。

【ワンポイント知識】　　　「盟神探湯」（くかたち、くかだち、くがたち）

日本の古代における審判法で、事の正邪を決めるために神に誓ったのち、熱湯の中を手で探る呪術的な裁判法。正しいものは手にやけどを負わないが、邪のものは手にやけどを負い、手がただれてしまうと言われる。後に、盟神探湯による裁判は行なわれなくなり、盟神探湯は神前に拝する時に身を清めるために沸かす湯の意味となった。鉄釜で熱湯させたお湯の中に笹の束を入れ、上下に振って背中に熱湯を浴び、残った熱湯を氏子らに振りかけて厄払いをしている。今でも、釜で沸かした熱湯を笹の葉などで参拝者にかける湯立などの神事はこの意味の盟神探湯に由来するもの。「フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』参照」　<詩編 7 編説教参考のために＞

聖霊降臨後第２２主日　2006 年 10 月 22 日

聖書のみことば

マルコによる福音書 10 章 17－31 節

イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」ペトロがイエスに、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言いだした。イエスは言われた。「はっきり言っておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

説　教

『あなたに欠けているものが一つある』

「いったい誰が？どのような人が救われるのだろう？」これは、昔から人々の関心テーマの一つでありましたし、今もなお議論が重ねられています。

また、聖書は人間が救われることに対してどのように語っているのだろう…信じる者だけが救われると語っているのだろうか。それともすべての人が救われると語っているのだろうか。いったい、どちらなのだろう？

このような問いに対して皆さんはどのように思っていらっしゃるでしょうか。

今日、福音書の日課の中に登場する一人の金持ちの男。彼は、小さい頃から神さまを信じて、律法の中に定められているものはすべて守ってきました誠実な人でした。「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え」と戒められている十戒も、すべて守ってきた完全な人

です。その彼が、今日、イエスさまの前に現われて、イエスさまにお願いの念を申しています。

「善い先生、永遠のいのちを受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」

小さい頃から、聖書に定められているものは何もかも守ってきた彼に欠けていることが一つありました。それだけ誠実に掟を守り、信仰者として完璧な人生を営んでいるはずの彼に、欠けている部分があったのです。永遠のいのちを受け継いでいるという実感がない！つまり、心が満たされないのです。自分が救われているという、救いの確信がありませんでした。

「善い先生、永遠のいのちを受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」

彼は走りよってイエスさまの前に現れては、慌しく願っています。「わたしが何をすれば救われるのでしょうか」と言う。今の自分は何でも出来る環境におかれているという、自信満々さから出てくる問いかけでしょうか。それをイエスに教えてもらいたいと。

そんな彼に対してイエスさまから返ってきた答えは、**「あなたに欠けているものが一つある」**ということでした。このイエスさまのお返事の中で語られる「欠けているもの」と言う表現は、彼が自分に欠けている一部分を求めて、補うような形で満たそうと、イエスさまに願っている「欠けているもの」とは遥かに違うものです。むしろ、彼が求めることとは正反対のものでした。

「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」

男は大きなショックを受けたでしょう。イエスさまのお答えを聞いた男は、**「悲しみながら」**イエスさまの前を**「立ち去った」**と、福音書が記しているからです。**「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」**このことは、今の彼には実行できるようなことではなかったのでした。

しかし、このことは、彼のみならず、多くの人にとって実行できないことです。自分のもっているものをすべて売り払って貧しい人たちに施すこと、これは誰にでもできるようなことではないのです。一生懸命節約しながら設けた財産を売り払って貧しい人たちに施す…先祖代々から受け継がれた財産をすべて売り払って貧しい人々に施すということ…実際に難しいことですし、出来るとしても、実践に移すまでどれだけ葛藤を強いられることでしょうか。

ところが、**「悲しみながら」**主の前を**「立ち去った」**この男が、帰ってからどのようにしたのか、聖書は教えていませんが、文脈から考える時に、たぶん出来なかっただろうと考えられます。けれど、この男性は誠実な人でしたから、今自分がもっている財産に満足し、神さまを信じる自分の今の

信仰に満足して、その生活に安住しようとしませんでした。自分の中から問題意識を持っていました。この世の誰にも負けないくらいの財産を持っていても、小さい頃から定められている律法をすべて守って神さまを礼拝してきたけれど、しかし、自分の中にこれだと言う確信がない、救われているという確信が持てない･･･自分の内面から浮かび上がってくる問い掛けに、彼は素直に向き合おうとしているのです。

「永遠のいのちを受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」
根本的なこと、イエスさまの問いかけと彼の問いかけにズレがあるにせよ、彼は今、自分自身の中から生じてくる問いかけをイエスさまの前に持ちかけている。

このようなことからも、この男性がいかに神さまとの関係に誠実な歩みをしているかがわかるでしょう。

しかし、それだけ誠実は彼が、イエスさまから語られたお言葉を耳にするや否や、彼は**「悲しみながら立ち去る」**しかない、人間でした。彼に出来ないことを命じられたからです。考えられないこと、本当は、聞きたくないことが自分の耳に聞こえたからです。

「悲しみながら」イエスさまの前を**「立ち去る」**しかなかったこの男性は、自分に欠けているある一部分を補おうと、そのためには何をすればいいのかとイエスさまに尋ねていたのです。このことは、彼の誠実さであり、それが彼にとって欠けているそのものでした。自分の内面の中の一部分、自分の持っているもののある一部分が欠けている。そこを補いたい！それを補うためにイエスさまに聞く人間の姿、傲慢な姿です。救いの確信を得ることは、欠けてしまったお茶碗の一部分を補うような形で得るものではないからです。ですから、イエスさまは確かな道を、具体的に教えられたのです。

「行って持っている物を売り払って貧しい人々に施しなさい。それからわたしに従いなさい」と。

しかし、彼は、**「悲しみながら立ち去る」**しかなかった。一部分を補うために願っていたことが、すべてを失う羽目になっちゃったからです。

イエスさまはこの男性に全財産を放棄するように命じられました。これは、イエスさまがこの男性にだけではなく、すべての人に向けて語られるメッセージです。この男性にとっては財産でした。わたしにとっては何でしょうか。皆さんにとっては何でしょうか。人によって違います。その人にとって、今、イエスさまに従うために、妨げになっているもの、それは何だろう…それが、今、その人にとって不必要なものだということ。

つまり、財産を放棄すれば救いが得られるということではないということです。救いを得るために財産放棄ではなく、イエスさまに従うことを妨げられているものがあるなら、それが不必要なものであって、

財産があるからその人は救われないという意味ではありません。または、財産がなく貧しいからその人はすぐ救われているという意味でもありません。どのようなものであれ、今、わたしにとって、あなたにとって、イエスさまに従うことを妨げているもの、それが捨てるべきもの、必要とされている人々に譲って具体的に確かな道を歩みなさい、ということ。

不必要なものは人を傲慢にさせ、救いも少し努力すれば得られるもの、と言う風に考えてしまうのでしょう。

「**あなたに欠けているものが一つある**」。これは、自分の中に、または自分のもっているものの中から救いの拠り所を見出そうとすること。そこに生活の土台をおいて、そこを拠り所として生きようとしているもの、それを断念して、神さま以外の何ものからも救いの確信を得ることを断念して、すべてを神さまに集中せよ！ということ。

この男性はできませんでした。持っているものと救いとを妥協させていたからです。もっているものもそのまま欲しくて、救いも得たい…あれも、これもすべて自分の手の中に入れたい…

つまり、自分自身が神さまのように完璧なものでありたい…この男の誠実さはこのことを教えています。自分に欠けている一部分を誠実に満たそうとしている彼は、イエスさまからショックが与えられた。「**あなたに欠けているものが一つある…**」

このイエスさまからのショッキングな語りかけは、「**あなたは神を神として礼拝していない、あなたが神になるために、真の神、善き方として礼拝されるべき神を、神として礼拝してきたのではない、自分自身が満たされるために用いりやすい神をつくり上げ、それに礼拝してきたのだ**」という問いかけだったのです。

ですから、イエスの前に、急いで、走りよって、自分が言いたい様にだけ言って、語られたことにはショックを受けるしかないのです。聞く耳を持たないから。ですから、「**悲しみながら立ち去って**」行くしかないのです。イエスさまの語られることばが理解できないから、「**悲しみながら立ち去って**」行くしかありませんでした。

このようなイエスと男性とのやり取りの後に弟子たちはイエスさまに尋ねました。

それでは、「**誰が救われるでしょうか**」と。この弟子たちの質問にイエスさまから出された答えは、「**人間には出来ることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ**」。

これは、誰が救われるだろうか…というわたしたちの問い掛けに対する答えです。つまり、人を救うのは神さまであること。人間が救われることとは、人が努力して手に入れることでも、持っている財産を使って買えるようなことでもないということ。つまり、救いは神さまにのみお任せされていることであると言うことなのです。

もし人が、自分自身の救いや隣にいる

人の救いに関しても、自分の見解を持って正しく語ろうとするなら、それは神の領域を犯していることのほかないのでしょう。今日の金持ちの男と同じように、自分の中に欠けている一部分を補うためにイエスさまを通して、神さまの領域を犯して、自分が神のように完璧になって、救われるか救われないかさえ自分が決めようとするなら、そのために信仰を持ったり、礼拝に出席するのもそのためであるなら、その人は神の座を狙って、虎視眈々とその機械を狙っているのでしょう。

イエスさまからわたしたちに命じられていることは、「**あなたの持ち物をすべて売り払い、貧しい人々に施しなさい。そして、わたしに従いなさい**」ということしかありません。つまり、「**イエスさまに従う**」これ一つだけです。イエスさまが歩まれた道、貧しい人々と共に生き、貧しい人々のために十字架で自分を捨てる道、この道を歩むことがわたしたちに求められているのみです。救われるか救われないか、あなたが、そしてわたしが永遠のいのちを得ているかいないか、それは神さまが決めることであるということ。それに不必要なものがあったら、わたしたちはそれを捨てる作業をするのみと。わたしたちはただ、神さまの救いの業に加えられていると、希望を見て、そこに信仰をおいて歩むだけしか、できないのです。

「**あなたに欠けているものが一つある**」と語られるイエスさまの言葉の意味を深く噛み締めながら、今週も自分の中の、また自分が持っているものの中から不必要なものを捨てる作業をともにしていきましょう。そして、イエスさまに従って、イエスさまが歩まれた道をともに歩みましょう。

水曜夕礼拝聖書のみことば

詩編７編

シガヨン。ダビデの詩。ベニヤミン人クシュのことについてダビデが主に向かって歌ったもの。
わたしの神、主よ、あなたを避けどころとします。わたしを助け、追い迫る者から救ってください。獅子のようにわたしの魂を餌食とする者からだれも奪い返し、助けてくれないのです。わたしの神、主よ。もしわたしがこのようなことをしたのなら、わたしの手に不正があり、仲間に災いをこうむらせ、敵をいたずらに見逃したなら、敵がわたしの魂に追い迫り、追いつき、わたしの命を地に踏みにじり、わたしの誉れを塵に伏せさせても当然です。主よ、敵に対して怒りをもって立ち上がり、憤りをもって身を起こし、わたしに味方して奮い立ち、裁きを命じてください。諸国をあなたの周りに集わせ、彼らを超えて高い御座に再び就いてください。主よ、諸国の民を裁いてください。主よ、裁きを行って宣言してください。お前は正しい、とがめるところはないと。あなたに逆らう者を固く立たせてください。心とはらのわたを調べる方、神は正しくいます。心のまっすぐな人を救う方。神はわたしの盾。正しくさばく神。立ち帰らない者に向かっては、剣を鋭くし、弓を引き絞って構え、殺戮の武器を備え、炎の矢を射かけられます。御覧ください、彼あらは悪をみごもり、災いをはらみ、偽りを生むものです。落とし穴を掘り、深くしています。仕掛けたその穴に自分が落ちますように。災いが頭上にあり、不法な業が自分の頭にふりかかりますように。正しくいます主にわたしは感謝をささげ、いと高き神、主の御名をほめ歌います。

説　教

『人の心とはらわたを調べる方』

国によって異なると思いますが、日本の場合、犯した罪に対してくだされる最も重い刑は「死刑」でしょう。皆さんは日本の死刑制度についてどのように考えておられますか。

「死刑制度」に関してはいろいろと議論があります。人間が人間に対して「死刑」を下す資格があるだろうか…それはいわゆる「殺人」と同じことだという立場から、死刑制度廃止を主張する立場の人。しかし、人の命を奪うほどの重い犯罪は「死刑」に処せられて当たり前といって、死刑制度廃止に反対する立場の人がいます。つまり、このように、「死刑制度」については以前から長い時間をかけて議論してきたことですが、未だに日本では「死刑制度」が行なわれています。

罪を犯した者に対して罰を与えること、つまり、人間に同じ人間を裁く資格が与えられているということ、これが制度化されているということはおかしいことかもしれませんが、しかし、制度化されていくことは、人間が人間を裁くためにではなく、人間の暮らしの秩序を保つためにはどうしても制度化されざるを得ないのでしょう。

わたしは今の日本の「死刑制度廃止」を訴える立場です。その代わりに、今の死刑制度に当てはまる犯罪は、「終身刑」に処せられればいいと思っています。「終身刑」の方が「死刑」より重い罰であると思いますし、犯したことに対して自分を振り返るためにも、人のいのちの大切さを訴えるためにも「終身刑」は適切な刑罰だと、思っています。

今日の詩編 7 編の背景にも似たようなことがあります。

今日の詩編は、エルサレム神殿におけるヤハウェの裁判が、その背景となっています。自分の潔白さを主張しながら、自分に対して刃向かってくる相手を裁いてください、神さまが審判を下してくださいと、切に求めている内容です。ですから、今日の詩編の背景には神殿の中で主なる神さまの審判が行なわれており、それが正しく下されることを信じている者が今日の詩編の祈り手であるということがわかります。

昔、イスラエルの周辺の古代メソポタミアでは、何らかの罪を犯した者として疑いがあるけれど、自分の潔白を主張する者がいれば、その被疑者を川へ沈めるような法律がありました。川へ沈めて浮かび上がればその人の罪の潔白さは認められます。沈んだままになりますと、やはり罪を犯していたのだと判断をしていたようです。

旧約聖書の民数記にも似ている記事があります。民数記 5:11-31。

これは、男性のために立てられた律法ですが、当時の周辺地域で行なわれていたことがイスラエルの人たちの暮らしの中に取り入れられ、イスラエルの人々の法律となっていくようになったものでした。

この他では、イスラエルの十二部族が与えられた土地を分ける際に用いられていたくじ引きが同じ背景をなしています。ヨシュア 14:2、ミカ 2:5 などに書かれていますが、くじを投げて当たったところが自分たちが住む領域となります。

このようなやり方で物事を決めていくのは、人間の中にあるものを人間は探ることが出来ないから。または、一つの部族にとって最も相応しい土地、その人にとって相応しいものとなるところを知るのは神さま一人しかいらっしゃらない、ということから人間の内面を探ることや大切なことの決め手を、このようなやり方に任せていたのです。

昔、日本にも似たことがありました。

熱湯の中に手を入れて罪の有無を判別するやり方です。神社の儀式の中で行なわれていたようです。今も少数の神社ではこのような背景を持つ儀式が身を清めるような意味合いで行なわれているようです。

このような昔のやり方が旧約聖書の中にも記されるようになり、詩編の中でも同

じ背景をもとにして、祈り手は自分の潔白を神に訴えているのです。

今日の詩編 7:10 の後半から見てみますと、このようなことが書いてありました。

「…心とはらわたを調べる方、神は正しくいます。心のまっすぐな人を救う方、神はわたしの盾。」

「**心とはらわたを調べる方**…」

この表現は、エレミヤが 11:20、12: 3 で、いのちを奪われ、敵たちに追うわれる際に神さまに訴えて祈る祈りの中で用いられていた言葉ですが、ヘブル語の独特の表現です。

ヘブル語は酷い苦しみを表現する際によく臓器に当てはまる単語を用います。今日も、心に当てはまる言葉の原語は心臓に当てはまる言葉です。「はらわた」と訳している新共同訳の言葉は「想い」とも訳せる言葉ですが、これの原語は「腎臓」に当てはまる言葉です。

このように心臓や腎臓といった臓器に当てはまる言葉を用いて表現することに大きな意味があるのですが、これらの臓器がどのような動きをしているのか調べることが出来る神さまに、この詩編の祈り手は訴えているのです。

というのは、それだけ自分が潔白であるということ。ですから、神さまに、わたしの中で考えていること、内蔵の動きさえもご存知の方に見ていただいて、自分が潔白であることを裁いてくださるようにと、神さまに自分を委ねて祈っているのです。

つまり、先ほど申しました昔のくじ引きや苦水を飲ませて罪の有無を調べていたやり方も、実は、迷信的なことのようであって、しかし、これらのやり方の向こう側におられるのは、人の内面を調べることが出来るのは神さまお一人しかいらっしゃらないということを表しているのです。人が人の内面を調べて、本当の正しさ、真実を見つけることはできないと言うこと。たとえ、それが自分自身であるとしても、自分の中にあるもの、心の動き、心臓や腎臓の動き、それを通して現れる自分の思いをすべて知り、表現することは不可能であるということなのです。

このような神さまへの訴えが礼拝の儀式の中で行なわれていたのです。エルサレムの神殿の祭儀の中で、神さまに自分の内面を裁いていただく、自分がこれだけ潔白であることを調べていただくのでした。

わたしたちはこの詩編の祈り手を通して、神さまを礼拝するこの礼拝がどれだけ大切なことなのか、知らされるのです。神さまの前に自分の内面を調べていただくことを通して、わたしは、わたし自身も知らなかった自分を知らされ、本当の意味で確かなものとされていくのだと言うこと。

わたしたちの礼拝の本来の求めるところはここにあるのではないでしょうか。習

慣的に、礼拝の日だから教会へ行くのではない。
わたしの中で動いている根深い罪の根性が、本当の自分を見えないようにしてしまうのです。罪人でありますから。わたしも知らなかったわたしがわたしの中に実際いるということ。それを知らせてくださるのは神さましかない。主なる神さまだけがわたしの心の思いを調べ、わたしをわたしらしくいさせてくださるのだと言うこと。

もっと申しますと、自分でもどうすることも出来ないこのわたしを、神さまが知っていてくださり、わたしにとって最も相応しい歩みが出来るように導いておられると言うこと。わたしが食事をするときにも見えない姿をしてともに座ってくださり、わたしが誰かとお話しするときにも、静かにその対話に耳を傾けておられる方。その方が、わたしの人生の歩み、どれだけ細かいことにせよ、関わっておられることを信じる信仰。今日の詩編の祈り手は私たちにその信仰を教えておられるのではないでしょうか。

祈ります。

私たちのはらわたをも調べ、私たちのいのちが今どのような状態にあるのか、本当の意味で自分を大切に歩んでいるかどうかを調べておられる神さまに、感謝をささげます。私たちはすぐ目の前のものを頼りにし、それが自分にとって本当は良くないことにもかかわらず、それを知らないわたしたちはそれに依存して生きることを喜びとしてしまいます。私たちが、私たちにとって大切なものを生かす歩みが出来ますように。自分に与えられている神さまからのいのちを輝かして生きる、信仰者としての歩みができますように、私たちの心の目を開いてください。主、イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。

【礼拝予定】

【主日礼拝】毎週日曜日 朝 10 時 30 分～

11 月 5 日(日)　全聖徒主日 聖　書：エゼキエル 37:1－14・ローマ 6:1-11・ヨハネ 15:1-17 主　題：主につながる聖徒　　　　　讃美歌 155(教会)/144(教会)/143(教会)
11 月 12 日(日)　聖霊降臨後第 23 主日 聖　書：申命記 6:1－9・へブル人への手紙 12:24－28・マルコ 12:28-34 主　題：あなたは神の国から遠くない　　讃美歌 272(教会)/399（教会)/365(教会)
11 月 19 日(日)　聖霊降臨後第 24 主日/収穫・成長感謝礼拝 聖書：列王記上 17:8－16・へブル人への手紙 9:24-28・マルコ 12:41-44 主題：与えられたものだから　　讃美歌 465(教団)/5 子ども賛美歌)/56(子ども賛美歌)
11 月 26 日(日)　聖霊降臨後最終主日 聖書：ダニエル 7:9-10・へブル人への手紙 13:20-21・マルコ 13:24-31 主題：わが戸口に近くいます主　　　讃美歌 134(教会)/139(教会)/239(教会)

【水曜礼拝】毎週水曜日　午後７時～

11 月１日　第一水曜日 聖　書：詩篇９編　　　　　　主　題：人間にすぎないこの私が 讃　美：303(教会)/鹿のように(L.P69)/307(教会)/222(教会)
11 月８日(水)　第二水曜日 聖　書：詩編 10 編　　　　　　主　題：苦しむ者に代わって苦しむ主 讃　美：333(教会)/み手の中で(L.P14)/167（賛美歌第二編）/358(教会)
11 月 15 日(水)　第三水曜日 聖　書：詩篇 11 編　　　　　　主　題：主のまなざしの中に 讃　美：496(賛美歌 21)/54(子ども)/ 誰でもキリストの内に(L.P)/424(教会)
11 月 22 日(水)　第四水曜日 聖　書：詩篇 12 編　　　　　　主　題：七たび練り清めた銀 讃　美：222(教会)/こひつじイエス(L.P)/567(賛美歌 21)/171(賛美歌第二編))
11 月 29 日(水)　第五水曜日 **聖　書**：詩編 13 編　　　　　　**主　題**：わたしの目に光を **讃　美**：496(賛美歌 21)/370(教会)/わたしが悩むときも(L.P)/163(賛美歌第二編)

（説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。）

【その他の集会】第三日曜日１２時３０分～ 聖書をやさしく学ぶ会
随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など

どの集会もどなたでもご参加いただけます。お待ちしております。